

が消息不明の3例を除くと2例だけが現在まで無症状に経過しており、うち1例に今回の検査で総胆管結石がみられた。胆管炎のために再手術を受けたものが4例、死亡が3例あり極めて不良な治療成績であった。胆嚢十二指腸吻合術が行われた1例も総胆管結石のため再手術となっており十二指腸とのバイパス術は問題の多い術式と考えてよさそうである。これに対し嚢胞空腸吻合術が行われた4例のうち死亡例1例を除く3例は良好で現在まで無症状に経過していた。しかしこの3例中今回検査した2例に膵管胆管合流異常が認められていることより癌化等の問題もあり今後再手術も含め厳重にフォローする必要があると考えられた。

15) 小児上部尿路通過障害 8例の治療経験

内藤 真一・大田 政廣 (山形大学医学部)
山際 岩雄・小幡 和也 (第二外科)
鷺尾 正彦

小児期に上部尿路通過障害をきたし水腎・尿管症を呈する疾患は、成人におけるように結石・炎症・腫瘍などは少なく、腎盂尿管移行部狭窄、重複尿管、膀胱尿管逆流などのように先天性の尿路の解剖学的異常によるものが大部分であり、また先天性水腎症は出生前診断のつく疾患として近年注目されている。当科では昭和58年以来、腎盂尿管移行部狭窄4例6腎に対して腎盂形成術、膀胱尿管逆流2例に対して尿管膀胱新吻合術、重複尿管2例に対して半腎摘出術の手術経験がある。腎は保存的に治療しており、現在までのところ良好に経過している。これらの症例に若干の考察を加えて報告する。

16) 肺癌を疑われた犬糸状虫症の1治験例

興梠 建郎・小林 貞雄 (水原郷病院)
井上雄一郎 (外科)
斉藤 透・鈴木 俊夫 (同 内科)

44歳の女性で、集団検診の胸部X線検査で左下葉 S₈ に円形陰影を指摘された。胸部 CT 検査、気管支鏡検査及び気管支造影では S₈ の 1.5cm 大の円形腫瘍と診断され、病理診断では Few atypical cell 悪性を否定できず、とされ肺癌の疑いにて、転科、開胸手術を行った。術中の所見では、腫瘍は 15×10mm 楕円球状で、弾力性に富み、比較的軟らかで、良性と判断し S₈ の楔状切除を行った。剖面では径 11mm 球状で、内に壊死物質を認め、病理検査で、その中に石灰化した寄生虫を発見し、犬糸状虫症と診断した。本症は非常に稀な疾患で本邦で 26例が、新潟県では 2例が報告されている。本患者も罹病 3年前に犬を飼っていた事がある。

17) α-Fetoprotein 産生肺癌の1手術例

高橋 善樹・山口 明 (新潟がんセン)
寺島 雅範 (ター胸部外科)
栗田 雄三・木滑 孝一 (同 内科)
横山 晶
角田 弘・鈴木 正武 (同 病理)

α-フェトプロテイン産生原発性肺癌の1手術例を経験したので報告する。

症例：57才、男性。

既往歴：22才頃、肺結核症で入院、加療した。

現病歴：昭和61年8月、胃潰瘍と診断され、入院加療の際、胸部X線写真で右肺の異常影を指摘され、また AFP 555ng/ml と高値を指摘された。自覚症状はない。

所見：右肺 S₃～S₄ に及ぶ 3.4×3cm 大の陰影あり、c T₂N₁Mo Stage II AFP 2997ng/ml と高値を呈していた。腹部 CT や肝シンチでは異常なく、嚢丸腫瘍も存在しなかった。AFP の分析では、コンカナバリン A 結合分画 28%、レンズ豆レクチン結合分画 84% であった。

手術：昭和62年1月、右上中葉切除術兼 R₃郭清術を施行した。p T₂NoMo Stage Ia 絶対治癒切除術であった。組織学的には中等度分化型腺癌であり PAP 染色で AFP の存在を認めた。

18) 末梢動脈疾患手術症例の検討

君川 正昭・藤田 康雄 (立川綜合病院)
片桐 幹夫・春谷 重孝 (心臓血圧セン)
坂下 勲 (ター胸部外科)

昭和44年から昭和61年までの18年間に、当院胸部外科で経験した末梢動脈疾患手術症例について、疾患を閉塞性動脈硬化症、ビュルガー病、その他(塞栓、動脈瘤、外傷など)に分け、また期間を昭和44年から50年、51年から57年、58年から61年までの3つの期間に分け比較検討した。

昭和58年以降症例数の著増が認められたが、これは閉塞性動脈硬化症の増加によるものであり社会の高齢化を反映しているものと思われる。今後更に閉塞性動脈硬化症症例を主体とした末梢動脈疾患症例の増加が推測された。

19) 大血管疾患の診断における MRI の有用性

片桐 幹夫・君川 正昭 (立川綜合病院)
藤田 康雄・春谷 重孝 (心臓血圧セン)
坂下 勲 (ター胸部外科)

当院では、昭和61年9月から磁気共鳴映像法(MRI)を臨床診断に導入した。装置は東芝製 MRI-22A である。これまで大血管疾患の診断の目的で17例に施行した。

疾患は、胸部大動脈瘤、解離性大動脈瘤、Annulo-aortic Ectasia である。

本法は、X線 CT を越える安全性と良好な分解能および多様な断面選択能を有しており、大血管疾患に対しては特に、瘤・解離腔の部位・形状およびバルサルバ洞の形状に関して良好な映像が得られた。臨床的に極めて有用性の高い画像診断法と判断された。

20) 当院における開心術 203例の経験

小菅 敏夫・山本 和男 (竹田綜合病院)
入沢 敬夫・岩松 正 (心臓血管外科)

1979年10月から1986年12月までに203例の開心術を行った。先天性疾患は96例で、心房中隔欠損症50例、心室中隔欠損症29例、ファロー四徴症7例、心内膜床欠損症、肺動脈狭窄症、部分肺静脈還流異常症各2例、右室二腔症、総肺静脈還流異常症、左室右房瘻、修正大血管転位症各1例であった。年令は2カ月～65才で平均20.8才であった。後天性疾患は107例で、弁膜症98例、狭心症7例、左房粘液腫、DeBakey I型解離性大動脈瘤各1例であった。平均年令は51.6才(20才～72才)であった。先天性4例、後天性8例が病死し死亡率は5.9%であった。ファロー四徴症、3弁手術例、冠動脈バイパス例の死亡が高率であった。死亡原因は、心不全2例、左室破裂2例、無顆粒球症2例、多臓器不全4例、肝炎1例、脳塞栓症1例であった。

21) 教室におけるフォンタン手術の経験

小熊 文昭・宮村 治男
今泉 恵次・金沢 宏 (新潟大学第二)
岡崎 裕史・藤田 康雄 (外科)
富樫 賢一・江口 昭治

三尖弁閉鎖症に対する機能的根治手術として考案された Fontan 手術を、単心室症5例に施行し全例の長期生存を得た。全症例とも術直後は強い右心不全症状を呈したが徐々に軽快し、術後1年半以上経過した4例では正常に近い運動能力を有していた。どの症例も、従来報告されている Fontan 手術の条件を全部は満足しておらず、手術成功のためには肺動脈の良好な発育と肺血管抵抗の低いことが重要な条件であると考えられた。

術後遠隔期の心臓カテーテル検査では、1例に遺残病変を認めたほかは修復は完全に行われていた。しかし、Fick 法による心拍出量は低値にとどまり、今後の慎重な経過観察が必要である。

22) 大腸リンパ管腫の2例

工藤 進英・高野 征雄 (秋田赤十字病院)
丸山 明則・金子 一郎 (外科)
広川 恵子・滝沢 恒世

大腸粘膜下腫瘍は比較的頻度が少なく、当院でも脂肪腫4病変、leiomyo sarcom 1病変、リンパ管腫2病変を経験するのみであるが、比較的稀とされているリンパ管腫2例、2病変を経験したので報告する。

大腸リンパ管腫の報告は本邦において30数例を数えるのみであるが、Bauhin 弁に発生した1例と、下行結腸に発生した1例を経験した。内視鏡像では非常に軟く体位により形態が変化し垂有茎性に見える。

Bauhin 弁に発生したリンパ管腫は内視鏡的ポリペクトミーにより完治し、下行結腸のリンパ管腫は腸切除を施行した。2病変の肉眼的特徴について述べる。

23) 大腸腺腫症の治療経験

小林 美樹・佐藤 錬一郎 (秋田組合綜合病院)
師岡 長・佐藤 攻 (外科)
倉岡 節夫 (新潟大学第一外科)
畠山 勝義 (秋田組合綜合病院)
長沼 雄峰 (小児科)

我々は昭和54年に、大腸腺腫症を基盤として生じた大腸癌にて死亡した35才の女性例を経験した。その時施行した家族調査にて第一子(10才)に大腸腺腫症を認めた。

以後、定期的に検査を施行し経過観察していたが、昭和61年12月(17才)に、全結腸切除直腸粘膜切除W型貯のう法による回腸肛門吻合、回腸ろう造設術を、昭和62年1月に回腸ろう閉鎖術を施行、1日4～5回の良好な排便機能を示している症例を経験したので報告する。

24) 大腸 IIc 型早期癌の肉眼像の特徴

工藤 進英・高野 征雄 (秋田赤十字病院)
丸山 明則・金子 一郎 (外科)
広川 恵子・滝沢 恒世

大腸早期癌の肉眼形態は I p, I ps, I s, II a, II a+ II c 型が殆どで II b 型や II c 型の報告は非常に少なく、本邦でも II b 型1例、II c 型6例報告されるのみである。

当院において3.5mmの微小 II c を含め内視鏡的に II c と診断され手術を行った3例を経験したので、その内視鏡上の特徴及び macro 標本での特徴について報告する。

1) いずれも発赤で存在診断が可能であり、発赤そのものが diffuse な拡がりを示す。

2) 空気量を加減することにより形態が変化し、空